

期待を語れず不安を管理する政治

標題は朝日新聞 7 月 21 日朝刊「日曜に想う」。参院選投開票の翌日に読んだ。こんな政治が低投票率、自公過半数などの選挙結果をもたらしたのだろうか。抜粋して紹介。

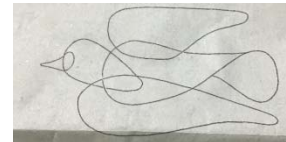
もうなにかを期待することは忘れた。それより、なにかを失うかもしれない不安がぬぐえない。そんな人々の心情に照準を合わせる政治の形が広がっている。

安倍晋三首相は民主党政権時代を「悪魔」と呼ぶ。通常国会の閉幕記者会見で、参議院選挙の最大の争点は「新しい時代への改革を前に進めるのか、それとも、再びあの混迷の時代へと逆戻りするのかわかります」と述べ、選挙戦でも繰り返した。

「逆戻り」？ 少子高齢化や巨額の財政赤字といった難題に依然として出口は示されていない。日本の「混迷の時代」は今も続いている。見通しが立たない将来への不安を「民主党政権時代」という言葉に担わせ、そこに戻りさえしなければ悪いことは起きないという政治的レトリック。具体的なイメージで印象操作するには、立憲民主党の枝野幸男代表を「民主党の」と「言い間違え」る必要があったのだろう。

一方で年金問題のように生々しい不安が表面化すると、金融庁の報告書を受け取らないというふるまいに出た。自民党の小渕優子元経済産業相は、この問題で野党を「ひたすら国民の不安をあおるようなことばかり」していると批判した。

けれども多くの方は野党にあおられているわけではない。不安のタネは、ほかのだれかに押しつける、なかったことにする。そうやって問題を直視しない政治に不安を感じている。期待を語れないとき、不安の管理に力を傾ける。与党も同じだ。



今日の日本の政治は「一強多弱」だと言われる。この言葉はちゃんと実態を表しているだろうか。

たしかに国会には、圧倒的多数派の与党と少なくともバラバラな野党という構図がある。けれども立法府の中の「一強」である与党は、行政権力をほしいままにしている首相官邸のしもべと化している。ちっとも強くない。

では、その官邸は強いのか。少子高齢化などの危機に力強い解決策を示しているとは言いがたい。日本の持続可能性が問われる課題とはただちにつながらない改憲などに人々の関心を誘うばかりだ。目の前に立ちはだかる問題に対して、やはり弱い。永田町という限られた空間では「一強多弱」に見える構図も、ずっと広い政治と社会という文脈に置きなおしてみると、ただの「多弱」である。

「一強」は、不安の管理をもつぱらとする政治には都合のいい言葉かもしれない。とりあえず強い者がいるかのような雰囲気は漂う。しかし、不安の管理と、不安の原因である問題の解決とは別のことだ。不安を管理しても危機は去らない。

(2019年7月23日)